

予定していた半分の土地しか配分されなかった
ので、パイン加工業の最盛期には土地が不足し、
営林署から国有林を借用して、山の中腹まで森林
を伐採してパイナップルを栽培していた。その後、
パイン工場が廃止され、パイナップルをつくらな
くなって借用地は営林署に返した。

前述のとおり、その後の大富における農業はサ
トウキビ栽培が中心になった。砂糖価格の低下に
対応するために、昨今のサトウキビ栽培は大型化・
合理化がすすんでいる。こうした流れを受けて大
富では、サトウキビ栽培に専念できる環境をつく
る必要から、集落周辺の国有地を伐採して土地を
拡大するとともに、大型機械を導入できるように
整地する土地改良事業に期待をかけた。そして1988
年、全体で約140haの面積にわたる土地改良事業
が着手された。

ところが、この事業に対して、自然保護団体「西
表島自然史研究会」から強い異議申し立てが出てき
た。保護派の主張は明快である。土地改良の予定
地には少なくとも3頭のイリオモテヤマネコがい
ることが確認されている。イリオモテヤマネコを
守るためには、生息環境を保護する必要がある
ので、生息域(コア・エリア)を保護するとともに、
周囲に緩衝域(バッファー・エリア)を設けること
が必要である。これを実現するためには、土地改
良事業の中止、あるいは代替地での土地改良、も
しくは農地として利用する区域を狭める必要があ
るといふのだ。

一方、大富の農家のなかには、いったん離農し
て本土で働いていたものの、土地改良によって土
地が増え、再び農業ができると聞かされて戻っ
てきた人も多く、保護派の主張をたやすく飲むこ
とはできない事情がある。

当初、この土地改良事業は、仲間崎、大富東工
区、大富西工区の順に3段階を経て実施されるこ
とになっていた。仲間崎では何も問題にならな
かったが、東工区では農家と自然保護団体が激しく
対立した。ヤエヤマカグラコウモリやイリオモテ
キクガシラコウモリ等のコウモリ類が問題とな
ったからだ。県、町、農家、自然保護団体の4者協
議の結果、コウモリ類の生息に配慮して計画面積
を約3分の1に縮小し、土地改良が行なわれるこ
とになった。自然保護団体の主張が多く取り入れ

られた格好になった一方、農家はやり切れない気
持ちでこれを承諾することになった。

現在問題となっているのは大富西工区である。
この場所は、イリオモテヤマネコの生息地である
と同時に、かつて営林署から土地を借用してパイ
ナップルを栽培していたところでもある。農家は、
たとえ計画面積を100%土地改良しても、東工区で
大幅に土地面積が縮小されたので、専業で農業を
やっていけないという。また、土地改良事業が環
境に負荷を与えることも十分に承知している人も
いる。それでも、外側の力によって振り回される
ことに対して、言葉にならない何かを主張せず
にはいられないようだ。

過酷な環境に耐えて開拓を行なったためか、大
富の人には早死にする人が少なくなかった。多くの
退団者を出しながらも地道に開拓を行ない、自分
の土地を得ることができた。そうした若かりし
頃からの、あるいは親の代からの努力を無駄にし
ないためにも、大富の農家はその場所にこだわ
っている。そうした農家にとって、農業を継続的
に行なうことは、個人のアイデンティティを確保す
るためにも、きわめて重要なことのように思われる。

これに対して、大富東工区・西工区の問題で、
土地改良に反対している自然保護団体のメンバー
は4人で、本土から移り住んで来た人が中心にな
っている。農業に携わっているわけではないので、
大富の農家との間には、土地改良区の自然認識に
かんして大きな隔たりがある。この両者の間の断
絶が、土地改良をめぐる問題としてそのまま顕在
化しているようだ。

4) 西部地区の歴史

NHさん(1911生まれ、男性)は、西部の祖納集落
出身で、今でも祖納に住んでいる。NHさんの話に
即して、西表島西部の歴史を簡単に振り返っておく。

大正から昭和初期にかけては炭坑景気と呼ばれ、
白浜や祖納は賑わった。当時の祖納は稲作が中心
であったが、収穫後の農閑期は炭坑関係の土木工
事に携わる人が多かった。またこの頃から、それ
まで盛んだった機織りが衰微していった。

祖納の人たちは、白浜まで行く道路のそばと仲
良川流域に水田を開いていた。一方、星立に住む
人は、主に浦内川流域に水田を持っていた。現在

でも、白浜と祖納の間には水田が広がっているが、仲良川流域にあった水田は、道路が通っていないことから、放棄されて荒れた状態になっているという。しかし、かつては船で仲良川をさかのぼり、自分の水田のそばに田小屋を設けて、そこに1週間くらい泊まって農作業に勤しんだ。

その頃は、田植えや収穫など労働力が豊富に必要なときは、ユイマールで作業を行なった。また、屋根用のカヤを集めるときにもユイマールで行なわれた。カヤを採る場所は、現在の住吉集落の辺りだった。今の住吉牧場には、星立の人の水田が広がっていた。カヤを刈るのは女性の役割で、男性はカヤを運ぶときに船を出して、祖納まで持ってきたという。

終戦近くまで、祖納の人は内離島との関係が深かった。石炭工場があり、その工場労働者のための物品販売所があったので、1週間に1度くらい内離島まで買い物に出かけた。また、集落内で組合をつくり、内離島の牧場で牛を飼っていた。主として農耕用の牛だったが、行事のときにはつぶして食べたという。しかし戦時中、内離島・外離島には日本軍の施設ができて、自由に立ち入ることができなくなったので、その頃から関係が薄らいでいったようだ。

戦後、白浜集落では林業が盛んになった。この理由は、復旧資材を伐り出すための森林が近くに豊富にあったことと、白浜港が3,000~4,000t級の船も入れる良港であったからだ。金城(1988: 48-59)によると、この頃、宮古群島から船浮集落に森林伐採隊が派遣され、材木を伐り出していた。戦後、山林を持たない宮古では、薪にも不自由し、カヤを薪の代用としているようなありさまだったので、宮古群島政府が、南部琉球軍政府の許可を得て、1947年から西表島から伐出を始めたという。こうした材木も、白浜港から運ばれていたのだろう。

一方、島の北部にある中野集落は、戦後の一時期、炭坑の町として栄えたところである。1948年、米軍によって中野に開設された上原採炭所は、1950年からは民間企業が譲り受けたものの長続きしなかった。

現在、上原で民宿を経営するTKさん(1940年生まれ、男性)の父は、宮古諸島の多良間島から入植した。1948年に森林伐採隊として白浜へ入り、

1952年に上原に移って中野の石炭を採掘し、それから米軍関連の仕事に就いたという。この履歴は当時の西表島西部における産業の盛衰を映しているようにみえる。

TKさんによれば、中野で石炭産業が衰退してから、周辺町有地の開墾が始まった。サツマイモ、陸稲、トウモロコシ、落花生などをつくり、これらで物々交換していた。国有林の木をこっそり無断で伐採して、砂糖樽の原料や薪材を取ることもあったと聞く。また、リュウキュウマツやモクマオウを用いて木炭をつくり、これを換金して、出身地の宮古などへ送金していたそうだ。

西部地区は、一般に土壌が酸性なので、パイナップル栽培には適すが、サトウキビにはあまり向かない。パイン加工業が盛んなときは、中野にパイン工場があり、台湾から多くの女工が働いていた。しかし、その後、輸入自由化の打撃を受け、缶詰用のパイン生産は続けられなくなり、観光化がすすむようになった。

船浦や上原などの集落では、現在、観光業が盛んである。民宿は島出身者が経営し、ダイビングなどの海の仕事は本土出身者が携わることが多い。それでも、生食用のパイナップルとマンゴーは需要が高まりつつあるほか、肉牛の飼育も堅調であり、農業を続けている人も少なくない。

5) アイガモ農法

祖納で稲作を行なっている家は10数戸ある。そのなかで、NSさん(1954年生まれ、男性)は、ただ一人、無農薬アイガモ農法によって米をつくっている。品種は台甲という台湾の米を使用し、二期作には主に黒紫米を植える。この黒紫米は、西表島の土産品として人気があるものだが、10年くらい前にインドから種籾を導入したものだという。

そもそも、1985年頃から全面的に食糧管理法が適用されるようになり、米の等級制度導入とともに農薬散布が半ば強制的に指導されたことに端を発する。従来、西表島では農薬に依存することがなかったので、NSさんは自分の体の健康が心配になり、豊かな自然の恵みを継承するためにも無農薬稲作を目指すことになった。そして、無農薬で生産された米を、ヤマネコも人間も共存していきたいという願いから「ヤマネコ印西表安心米」と

命名し、1989年には西表安心米生産組合が設立された(石垣, 2000)。組合発足時には組合員が7名いた。しかし、現在はNSさん1人である。普通にイネを育てる場合と比べて重労働であるため、次第に減少していった。

アイガモ農法を行なう水田では、反当たりの収量が300kg程度(最低150kg~最高350kg)で、通常の450kg~500kg弱と比較すると約半分である。しかし、通常の2倍以上の単価で販売しているので、収量は大きな問題ではないようだ。

現在、このアイガモ農法は、イリオモテヤマネコ(方名:ヤマピカリヤ、ヤママヤ)による被害に遭っている。4町歩ある水田に、田植え後、除草のために200羽余りのアイガモを放すのだが、その3分の2程度はイリオモテヤマネコの食害に遭う。1日に30羽が被害に遭うこともあるという。対策として、夜間にアイガモを回収することを2年間続けてみたが、そのための労力が大きく、今では止めている。もともと、アイガモ農法は手間をかけずに除草することに利点があるのだから、毎日、ケージから出し入れしないとイケないならば、その利点がなくなっていることになってしまう。イリオモテヤマネコを「ヤマネコ印」というブランドとして利用しているのだから、食害に対しては多少目をつぶっているところがあるようだ。

この農法の利点としては、安心して食べられることのはかに、アイガモを出荷できるということもあるはずで、実際、アイガモ導入後間もない頃はそのようにしていた。けれども、飼育していると情が移り、殺すのが忍びなくて、最近では出荷していない。

安心米の顧客は、最近、減少傾向にあるようだ。組合員が1人しかいないため、不作のときに供給責任を果たせずに顧客を逃がしてしまったからだ。一方、豊作のときは5tも余ることがあった。アイガモ農法による米づくりだけでは安定した収入を得られないので、収入不足を補うために、冬期はイノシシ猟に出ることにしている。獲ったイノシシは、島在住の人や郷友会の人などに販売し、年間100万円程度の収入を確保するようだ。

3. マイナーサブシステム

1) 多様なマイナーサブシステム

安溪(1986)には、農閑期である12月末の西表

島西部の様子が記されている。

自転車に乗った奥さんが通る。荷台に魚をつく「イグム」銚をくくりつけて「ガサン」というカニ(ノコギリガサミ)を捕りに行くという。干潮になる時間帯にあわせて、マングローブ林のなかを歩きまわるのである。銚といっしょにくくりつけてある、二本の竹のとってがついた網は、「サイマー」という小エビをすくうためのものだという。干潮のリーフの上を歩いて、タコとりに行くという老人に出会う。持ち物は網目の袋だけだが、タコをとるための銚(ディーイグム)は浜にある船に置いてあるのだろう。別の老人は、朝早く舟に乗って浦内川の上流まで出かけ、「フチビ」と呼ばれる食用のシダ(オオタニワタリ)の新芽をつんできた。水温が低い冬場には、刺し網漁もさかんである。(安溪, 1986: 127)

これは1981年の状況を表したものであるが、ここに挙げられている漁や採集は、すべて今日でも行なわれている。西表島は自然環境に恵まれており、多様なマイナーサブシステムが存在するので、まだその概観を知るにはほど遠い状態にある。したがって、この報告は、西表島におけるマイナーサブシステムの一部に過ぎないことを予め断っておく。

2) イノシシ猟

西表島のマイナーサブシステムとしては、まずリュウキュウイノシシ(方名:カマイ)の猟を挙げるべきだろう。イノシシ猟にかんしては、ほとんど聞き取り調査を実施できていないので、ここでは今井(1980)の研究を中心にまとめておく。

現在のイノシシ猟には、猟銃で仕留めるかワイヤーを用いた「はね罠」を使うかの2通りがある。ワイヤー罠は、1940年頃、台湾人が西表島西部に導入して、それから島中に広まったとされている。

ワイヤー罠以前は、犬を使う方法と石を用いる圧殺式の罠があった。前者は、数頭の犬をイノシシ道に入れて跡を追わせ、犬がイノシシを追いつめているとき、猟師が短い手槍を投げるか、後肢をつかんで引き倒し、山刀(方名:ヤンガラシ)で絶命させるというものである。後者は、ヤマと呼ばれる方法で、5~6名くらいが1組になってつく

る大がかりな罠だった。ヤマをつくるには、重い石をいくつも運ぶので、主に水田の周辺に設置した。また、仕掛けるのに長い時間を要するので、おのずと罠の数は限定されていた。

そういう状況におけるワイヤー罠の導入は、それまでのイノシシ罠を瞬時に変えることになった。ただし、これを単にその効率のよさや、容易な技術習得だけに原因を求めるのは不十分である。終戦後、食糧難を逃れるために、マラリアが撲滅された山奥に人々が入って田畑を切り開くようになり、イノシシが従来以上に害獣として意識されるようになった。これにより、島民が自らの田畑を守り、かつ貴重な蛋白源を獲得する有力な武器として効率的なワイヤー罠が採用されるようになったという。

1955年頃から西表島の人口は徐々に減少していったものの、イノシシは活発だった。これは、イノシシの捕獲に対して、有害獣駆除の奨励金が交付されていたことと、イノシシの肉が換金性を高めていったことによる。狩猟期間中（11月15日～翌年2月15日）、専門的にイノシシを行なう人が現れてきたのはこの頃のことである。

しかし、本土復帰の頃から過疎化に一層拍車がかかり、生活環境に大きな変化が生じた。東部では、イネからパイナップルやサトウキビへと主作物が転換し、従来の農閑期が繁忙期となったことや、土木作業によって現金収入を得られる機会が増えたことから、猟師の数は大幅に減少した。これに対して西部も、台風によって猟場が被害を受けたり、新たに現金収入をもたらす副業を見つけるなどして、猟師の数が次第に減っていった。

現在、イノシシ罠を専門的に行なっている人は少ないが、3名で組んで1シーズンに300頭ほど捕獲する人々もいるという。こうした例のほかに、一種のゲーム感覚でイノシシ罠を楽しむ人の数は少なくないようだ。

なお、イノシシを獲るために仕掛けた罠にイリオモテヤマネコがかかることがときどき生じ、学術的に発見されるまでは、そうしたヤマネコを喘息の薬として食べたこともあったようだ（岡村・西平, 1991）。

3) ガサミ漁

ガサミは、マングローブが発達しているところ

に生息する大型のカニである。このため、東部では仲間川下流、西部では浦内川下流などでガサミ漁は行なわれる。大富集落の TM さんは、仲間川下流でガサミを捕る。

TM さん（1917 生まれ、男性）は竹富島出身で、1952 年に開拓民として大富に移住した。翌 1953 年にはマラリアの防遏員となり、開墾・整地のかたわら、採血、投薬のために奔走した。その後、1957 年から始まったウィラープランによって計画的なマラリア撲滅をすすめ、1961 年には西表島全域でマラリア撲滅に成功した。

ガサミの捕り方であるが、今は専用の籠を使っている。この籠を使い始めたのは復帰の頃からで、それまでは竹の竿先に鉤状の鉄筋を付けた道具をつくり、それを使用していたそうだ。大富にパイプ工場があったときは、昼休みに工員たちが、仲間川に架かる橋の上から傘を下向きにしたような籠を下ろし、30 分程度してから引き上げてガサミを捕るという原始的な漁法もあったらしい。

TM さんの考えによると、川では卵を抱えたメスに出会うことがないので、ガサミは海で産卵するとみている。ガサミは年中捕れるが、春先に捕れるものは小型なので逃がすことも多い。一方、10～11 月頃には、1kg 級のガサミが獲れる。ガサミ漁に最高の条件とは、天気が良く、風速は 8m 以内で波が 1.2～2m 程度、さらに日没時が満潮のときであるという。

4) ムンツァン捕り

西表島には、ほかの離島から移住してきた人が多い。このため、それぞれの出身地において盛んなマイナーサブシステムが、西表島の地にも根付くことがある。ムンツァンと小浜島方言でいうイイダコ捕りもその一例である。

大富に住む SK さん（1935 年生まれ、女性）の出身地は小浜島だ。後述するように、小浜島はムンツァン捕りが盛んな島である。ムンツァンは、昼間でも夜間でも捕れるが、それぞれ捕り方が異なる。SK さんの場合は、昼間にムンツァンを捕る。

ムンツァン捕りの時季は 9～12 月で、北風が吹き、小雨が降るようなときが最高の条件である。由布島の付近がよく捕れるポイントだが、大富からは遠いので仲間崎周辺で捕ることが多い。SK さ

んの捕り方は、およそ次のとおりである。すなわち、まず浜にいる小さなカニを捕まえる。これを裂いて、持参してきた藁の先にぐるぐると縛れば準備は終了する。ムンツァンが中に棲んでいそうな小さな穴を探して、そこにさきほど準備した藁を、餌となるカニ肉の方から入れる。ムンツァンが入っていれば、カニ肉を食べようとするので、藁が動く。それを見つけると、挿入した藁をゆっくりと穴から引き抜く。上手に穴から藁を抜くことができれば、それに釣られてムンツァンが穴から出てくる。このとき、一気に目と目の間の急所を小さな鉚で突けばよい。

技術的には、藁を引き抜く速度と、ムンツァンを仕留めるタイミングが難しいらしい。また、量を多く捕ろうと思えば、準備作業にもあまり時間をかけることはできない。上手な人は、餌となるカニを捕まえて藁にくくりつける作業と、ムンツァンを誘き寄せ一気に入る作業を、間断なく能率的に行なうことができるようだ。なお、西表島と小浜島でムンツァンを捕った経験のあるSKさんによると、島によって地域差があって、小浜島のものは白っぽいが、西表島のものは浅黒いそうだ。

捕ってきたムンツァンは換金され、1斤(600g)当たり1,000円で取り引きされる。多く捕れるときは10斤くらい捕れるので、10,000円になる。売る場合、その相手は個人または飲食店などである。料理するときは、油と醤油で炒めることが多いという。

5) 海藻採り・貝採り

SKさんは海藻を採るとき、大富集落から近い仲間崎まで行く。モズクとモーイ(イバラノリ)の時期は3~4月、カーナーは5~7月だという。モーイは、もっぱら大宜味村出身者が採り、本島へ送って現金収入を得ている。本島北部では、これを加熱して溶かし、味付けして固めたモーイ豆腐が食されるので、需要が多いようだ。また、アーサは黒島が本場で、かつては西表島の米と黒島のアーサが交換されていたという話も聞かれた。

ツノマタについては、琉球大学教育学部社会科教育研究室(1997:38-39)に報告がある。それによると、西表島におけるツノマタの採集は、1996年の時点でほぼ壊滅状態であった。1970年代の後半が

ツノマタ採りの最盛期で、1990年頃まではツノマタ組合もあったが、手間がかかることと、買い取り業者がいなくなったことから採られなくなった。この報告に登場する白浜集落の人は、月の1週間~10日間ほどツノマタ採りに出かけ、残りの20日間以上は、ツノマタを海水に浸けたり乾燥させたりしながら、自然脱色する作業に当てていたようだ。

貝採りも、シャコ貝(方名:ギーラ)やウニ(方名:カテチ)などを目当てに、かつては盛んだったようだ。しかし、乱獲が影響したのか、貝の数は非常に減ったという。

ガサミと同様にマングローブ林に生息するシテナジミ(方名:キソ)も採ることがある。これは貝殻がとても大きいので、貝同士で叩いて割って身だけを持ち帰るようにする。

6) 山菜採り

山地のある西表島では、山菜採りも盛んである。ツワブキ、ヒカゲヘゴ(方名:バラピー、ヤマダイコン)、オオタニワタリ(方名:フチビ)、アダン(方名:アダヌ)、タケノコなどを採る人は多い。

ヒカゲヘゴは、祖納・星立に伝わる節祭のときに必ず食される。このため、事前に公民館幹部が役割分担して山に入ってヒカゲヘゴを採りに行くらしい。また、オオタニワタリとアダンはともに、日常的に食べるわけではないが、法事には欠かせない植物である。

タケノコは、4種類が知られていて、小さい方からシュナル(島タケノコとも)、イガダイ、ダイムン、マトウクと呼ばれている。シュナルは3~5月に採ることができ、美味といわれる。ダイムンとイガダイはおよそ4~7月頃に、マトウクは7~9月頃に採れる。イガダイは、竹細工の用材として適する。ダイムンは、赤瓦の下に敷く材としてを用いることがあるが、径が太くて割らないといけなないので、高山に生えるヤマンダイを使うことが多い。かつては、ユイマールでヤマンダイを採りに行っていたようだ。

山菜ではないが、かつては木の実を集めて食べることもしばしばであった。リュウキュウコクタン(方名:クルキ、キダキ)の実のほか、方名でウルビャー、ヤトシチビャーと呼ばれる木の実も食べた。祖納の人によれば、グアバ(方名:タンシル)

を採りに開拓前の住吉まで出かけていたそうだ。

7) 水田漁労

水田漁労については、聞き取り調査が十分でない。しかし、安室(1998)が祖納を例に詳しく報告しているの、ここにクモリカチとオーニケリについて記す。

クモリカチは、田の水口にできる水たまり(ミズクモリ)から水を掻き出して行なう漁法である。水田の生息する魚はすべて対象となるので、フナ、ウナギ、エビなどを捕ることができる。時期的には、主として稲刈り以降の夏場に行なう。

オーニケリは、オーニ(ウナギ)を切ることを意味し、ウナギを切り取る漁法である。11月~翌年の田植えの直前まで行なわれる。時間帯としては夜9時頃から1~2時間くらい行なうのが標準である。このため、単にイザリということもある。

冬の間、夜9時以降になると、田ウナギは腹を上にして寝る。これを、できるだけ身を傷つけないように頭を狙って、ノヒリ(鋸)などで切るのがオーニケリのやり方である。

4. 染織

西表島は、豊富な植物資源と良質な水資源に恵まれていながら、織りの伝統がいったん完全に途絶えた島であった。しかし、東部においては、戦後の計画移民によって大富集落にやって来た大宜見村・竹富島からの移住者が中心となって、農閑期の副業として再興された。喜如嘉からは芭蕉布が、竹富島からは竹富ミンサーが伝わり、大富で定着していった。また、1971年に誕生した美原集落にも竹富島出身の移住者が織手となって、染織を行なっている。

一方、西部では1980年代になって織手が定着し始めた。各地から若い人たちが来島し、島の工芸的資源に魅せられ、染織、陶芸、木工、和紙などに携わる者が出てきた。1985年以降は、県工芸指導書による巡回指導やアドバイザーによる講習等を積み重ね、新たな伝統工芸が産出されている(八重山ミンサー記録誌及び記録フィルム作成委員会編、1993)。

大富集落に住むTTさん(1939年生まれ、女性)は、現在、東部地区における染織の指導者として

活躍している。もとは竹富島の出身で、戦後、移民して西表島にやってきた。当時は、開拓にもなって生じる木材を薪にして石垣島で売って収入を得ていたという。

織物を始めたのは1972年であるというから、意外なほどに歴史が浅い。その後、着実に仕事を続けていき、1989年には西表島織物組合設立に関わった。現在、この組合は、竹富島と小浜島の人々も含め、竹富町織物組合へと発展している。

竹富町では、染織の後継者育成事業として、無料で受けられる講習会が開かれている。これは、西表島西部、東部、竹富島、小浜島の4地区のなかから2地区が選ばれ、毎年行なわれているもので、講習期間は半年、地区で指導的役割を果たしている人が講師となる。2000年8月に大富を訪れたときは、ちょうど講習会が開かれており、TTさんが講師を務めていた。

受講生は5人で、染織を副業とするために技術を身につけたいという地元の若い人が講習を受けている。講習会は2地区で開かれるので、毎年、10人の修了生が生まれている。しかし大富では、講習会を終了しても、現金収入を得るだけならば、ほかの仕事を探す方がよいので、実際には織らない人が多い。若い人はだいたい勤めに出るので、ただ組合費(年間6,000円)を払っているだけの人もいそう。大富では、由布島で観光関連の仕事に就く人が多いという。

せっかく受講しても後継者がなかなか育たないことに対して、修了生に対するフォローが不足していると批判する人もい。しかし、確実に染織の担い手となりうる人は増えているので、少しずつでもよいから続けて、時間に余裕ができてから本格的に織るようになればよいと、今後に期待している人もい。

講習会を終えると、修了生は必ず竹富町織物組合に加入しなければならない。現在、東部地区には23名の組合員がいるが、そのうち大富の人は15名である。自分で織ったものを売るときは、竹富島に事務所のある織物組合を通して販売することになる。大富の人は、竹富島からの移民が少ないので、このルートを活用して換金する人が多いそう。これに対して、西部地区の人は、伝統的な染織のやり方を踏襲している人もい、

創造的な染織方法で製品をつくり、主に観光客相手に販売する若い本土出身者も多いようだ。

西表島は山地があるので、自然染料が特に豊富といえる。島を特徴づける植物はクール（紅露）で、茶色系の染料として重要である。これは山の中にあるので、竹富島や小浜島にはみられない。ほかに茶色系は、ガジュマル、ゲットウ（方名：サミ）、赤茶色はヤエヤマヒルギ、銀色はアカメガシワ、黄色系の染料として、フクギ、ヤマモモ、ギンネム、シロハナセンダン、サトウキビ（方名：ウージ）などがある。藍色はリュウキュウアイを使う。もちろん、フクギに藍をかけて緑色に染めたりもする。大富では、ヤエヤマヒルギ、クール、ヤマモモ、フクギがよく使われるが、リュウキュウアイは貴重だという。

ヤエヤマヒルギは、マングローブ林まで採りに行く。むやみに伐るとマングローブを痛めてしまうが、伝統的な伐採方法で、個人が使用する分だけを伐るだけならば持続的に利用できる。ヤマモモは樹皮を利用するので、上手に皮だけを採れば伐る必要はない。フクギについては、台風で倒れた木や、道路工事などにともなって伐採される木を利用することが多い。

5. 観光

1) エコツーリズム実践の経緯

Iで触れたように、西表島の観光は、東部地区と西部地区とでかなり形態が異なる。東部は、バックツアーが優占しており、近年、観光客数が著しく増加しているのに対し、西部は、豊富な自然資源を生かしたエコツアーが着実に盛んになりつつある。西部には、浦内川上流にあるマリユドゥの滝、カンビレーの滝、あるいはヒナイ川上流のピナイサーラの滝といったダイナミックな景観資源があり¹²⁾、これらを中心にエコツアーが組まれている。ここでは、こうした西表島におけるエコツーリズム実践の経緯を、真板（2000）を参照しつつ整理しておく。

西表島は、日本一広いマングローブ林やその景観を一望できる浦内川などを有しているので、観光客を引き寄せるポテンシャルがもともと高い。しかし、1972年の本土復帰の頃までは、観光開発が進んでいなかったため、来島するのはカニ族と

呼ばれるキャンパーが中心だった。やがて、東部と西部を結ぶ北岸道路が1975年に開通し、観光バスが走るようになると、石垣島から大型バスでやって来て、急ぎ足で島内を見て回る日帰り型のマストツアーが始まった。

一方、1965年にイリオモテヤマネコが発見され、その希少性ゆえに、1975年にはライハウゼン書簡により「ヤマネコを守るために島民は移住すべきだ」という考えが提唱された。これをきっかけに、自然保護か観光開発か、つまり「ヤマネコか人間か」という議論が始まり、島が二つに分かれて対立した。このときの自然保護派は、本土から移住してきた人か、生活圏を東京に置く研究者が中心だった。

ところがその頃、パイナップルやサトウキビ栽培などの基幹産業が衰退し、代替する産業を創出することが必要との認識から、農家が島の資源を生かした観光のあり方を模索し始めた。また同じ頃、テレメトリー調査によって、それまで山奥に棲んでいると思われていたイリオモテヤマネコが、もっぱら山地と平地との境界部に棲息し、集落周辺に出てきて田畑の生物を捕食している様子が明らかになった。つまり、自然の保存のために農業をやめることが、ヤマネコの餌場の消失につながるということがわかったのである。1983年にこの調査結果を踏まえた住民説明会が実施され、これまでの対立図式から「ヤマネコも人間も」と開発と保護の両立を目指す方向で、島の人たちの意識が変化していった。

そうしたなか、1990年に環境庁は国立公園におけるエコツーリズムのモデル地域として西表島を選定し、島民との協力を得て全島資源調査を実施した。そして、この結果をもとに1994年、『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥー——西表島エコツーリズム・ガイドブック』が作成された¹³⁾。この本の出版を契機に、1975年から地道な島おこし活動を続けてきた「西表をほりおこす会」の有志や竹富町観光協会青年部のメンバーらが中心となってエコツーリズム協会準備会を設立し、島民が中心となった勉強会も始まった。以後2年間の準備期間を経て、1996年5月に「西表島エコツーリズム協会」が正式に発足し、現在に至っている。会員数は、2000年5月現在で39名である。

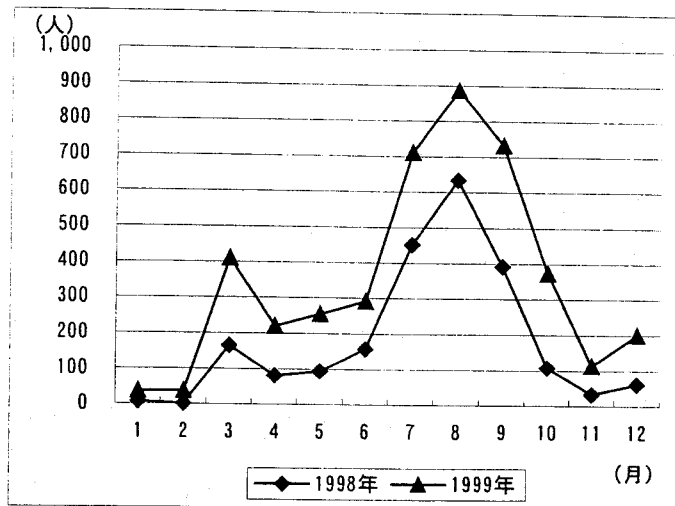


図10 浦内川観光のエコツアー利用者の月別変動
浦内川観光資料をもとに作成

2) エコツーリズムの実践例

西表島西部を代表する河川・浦内川は、上流にマリユドゥの滝とカンビレーの滝という2大名所があり、下流にはマングローブ林が発達しており、観光資源に恵まれている。ここを舞台に、エコツーリズムを展開しているのが(資)浦内川観光である。

浦内川観光のTSさん(1953年生まれ、男性)は、いったん島を離れ、Uターンして島に戻った。1980年頃に親が行っていた遊覧船事業を引き継いだ。その頃の観光客は、大きな荷物を背負って来島するカニ族と呼ばれる人たちが多く、主にロコミで集まっていた。しかし、次第に観光化されるにつれて、観光客とのトラブルや自然破壊など、マスツーリズムの弊害が目についてきた。そうしたなか、1996年からエコツアーを開始した。現在ではエコツーリズムが完全に定着し、逆にエコツーリズムの弊害も表面化しつつある。

エコツアーとは、ガイドの資質によって、提供しうるサービスに大きな差が現れる。それなのに、いまはエコツアーの需要が供給よりも上回っているため、「ガイドに聞いても何も答えてくれない」「行きたいところに連れて行ってくれない」などの不満が挙がっており、ガイドの養成が急務となっている。同時に、ガイドの質を底上げするために、基本的な安全対策、自然・文化の知識については知っていないとガイドになれないような認定制度を設ける必要があると言われている。

現在、浦内川観光のガイドは、本土出身者によって占められている。募集を出しても、島出身者はほとんど来ないようだ。そこで、TSさんは島の小中学生を無料でエコツアーに参加させることにした。これは、環境教育効果だけでなく、ガイドという仕事の面白さを伝えたいという気持ちから始めたものだ。

浦内川観光のエコツアーでは、カヌーで川を下るほか、ときどき休憩を兼ねてマングローブ林に上陸する。脆弱な環境であるため、一度入った場所には、2週間(夏のピーク時は1週間)空けてから入るようにローテーションを組んで、負荷を与えないよう配慮している。しかし、そうした配慮は義務づけられていないので、会社によっては大きなインパクトを与えている可能性もある。このような現状にかんじてTSさんは、マングローブ林への上陸などについて、行政指導が必要と考えている。

エコツアーの利用者は、図10にみられるとおり、季節によって変動が大きい。経営を安定化するためには、冬場のツアー利用者を増やすことが求められている。そこで浦内川観光では、最近、エコツアーに修学旅行生を受け入れている。普段はガイド1人に最大でもツアー客は8人までと制限しているが、修学旅行での利用の場合は人数が多いので、最大制限を10人に緩めている。その代わりに、自然への負荷を大きくしないために、上陸ボ